



和装本

ケ 5

44

88





武馬必用序

武人經弓箭緯馭馬豈有二哉凡世有千里馬馭者不常有自辱於奴隸人之手茲齊藤定易受馭道于大坪家最角立者也妙術手段出廣

秀之門精勤鍊行銳意於道  
聿觀其所著之武馬必用大  
坪之傳至定曼而獨得其宗  
矣僕又幸步于其階梯及于  
此門者皆奇偉雄傑得冠一  
時誠知要術奧義之指而恒

其德耳今以棄禮軍相醫為  
五馭其說詳也可謂文武兼  
資乎哉欲續此術者何可廢  
斯書哉故明中馭之故實而編  
之洵足開其傳云爾

昔

享保二年次丁酉仲春

朝散大夫志州牧藤巨澤

題于詠歸齋中



*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '詠歸齋' and '藤巨澤'.*

大坪本流武馬必用

序

天地之間、乾の乃馬とあり、坤の道、牛  
とあり。陰陽交り、感して、萬の物、成り、生  
その生、あるを、いふ、あり、その、大極の、一、成  
具、く、あり、る、を、いふ、古今、不易、其、乃、故、牛  
牛馬の、凡、質、を、異、と、し、牛、を、牛、馬、を、馬  
して、引、守、の、徳、あり、る、を、徳、あり、る、を、徳、あり、  
故、遠、の、徳、あり、る、を、徳、の、理、子、を、徳、あり、る、を、  
系、人、を、徳、あり、る、を、徳、の、理、と、し、牛、馬、を、徳、あり、る、を、

法政海のりふを正しく安を重しかりしよし  
事とありて是れ艦のしとくみま  
本も心と法く寒わすしふせさるめや  
倭子大坪小笠原内庭のる書ありて後  
大和流八條流の番流の艦方の書あり  
庚子子馬経大金王良相の經元亨良  
子集の妙しかりし書ありは外倭子後  
せるる書多し一義孝公の日記も聖徳太子の  
叙馬本記より叙る日記も日本武尊の  
一貫問手記より下りて地記も志すおれと

近代のる宗人子思あぬといふ事あり  
我子用たりし事を知る事ありあり礼  
駁軍叙の古実を行するよりりてくる  
たりし教を初めてして後方書を  
乃とらるれ乃と思ひありし事あり道徳信  
一倭子知の病ととられし我の助と  
形とありしそれありと軍叙との教本  
かるとしとて常叙を軍叙のありし  
事とありし乃篇を習ひ宗機とゆふたせ  
る軍叙よりりて人やおもわし昔の



又靜かな代子生進て控さるり人ともいひ  
あり事終り書加へ友事終り至も版  
わする事あり今あり不板あり  
一わく武馬必用とて世子弘光傳り  
あらん

大坪本流武馬必用卷之一

軍馬 目錄

- 一 弓馬者武士の者一子勅へ道理を知り
- 一 古今の大將多し諸將を換益あり或知り  
附 和漢の勇士言ひの事
- 一 馬子感念の理あり
- 一 馬を撰り好くする理の事
- 一 軍のる生れより得きの徳を知り
- 一 軍馬訓一乃復
- 一 操行る武事習ひの事







給ふ契丹の人耶律氏管ふ小宗一原十演ひつ以  
 隣て从軍の難を逃れやてひまを具一也  
 平家之智盛も良ふ小宗一少子之海をこる  
 甲て敵の敵をのりて一は也一交経の古史を  
 古今の奇功を立て 福信の保生月毛を代の  
 名を成せり史人おこる人是を重ん  
 一好まこる人お総て三馬の事子生れく其  
 装の業を継ぎけり以忘る危らんや志一あ  
 と漢武をこる好く大宛を伐て武を驟一  
 唐云を石産の事と今負甲敵小こる也



うーのー甲我五れ業於仲徳宗整あとの本下  
 邦と云名する少し玉と失ひ礼と比せり比添すく  
 心とさむむー一過不及の事小此あり但中庸の  
 叶を以て河運の乃あり有とす古流子教と  
 有る道ハ礼と云ひと好ま先云ふとあり夫ハ民の  
 利あり利ハ不遠人之知て民の害と有る故に  
 土をさらるの乃を去るくく次ま一編小忘  
 一七孝以行一君の為政ありその中  
 史書に云劉豫列股の肉は生一ををを嘆一  
 云我乱世を生れ名政備と切政を一四也



る上子初るる日る一それ為子鞠のある  
下の肉満く瘦骨子徹其令体むとまらう子  
半月股の肉肥うりと大功を為人の勤を凡かく  
乃と一倭国の君が家云其少年よりるを  
初り少く神を所とて麻呂の明侍以貞  
任宗任の良相と年月全銭一武術家術の  
別敵と日夜戦く流子東夷と歩後一陸大  
庭に上り上りある子よりて徳義八節の矢前以  
の道整伏保てり又海平らうてふし平家村方  
より景清盟次るといふ大別の名を始とて二十

騎をりおとくと徳言父子平心う告るふのりて  
運宗のまを子思て運合あるとあつるを  
皆城内へ引入れ呉玉不給もにそ外むり此  
人を将子なるといふ武藝をあらう一けく廣  
神子出く旗旗を立貞古教をなう一て親  
弟をあげあふる武宗合で軍の統成者子  
るあも教己の勤とせり垂乃世ふりて武  
功立一人の子孫皆安府下で富貴をうけ  
先祖る上のく一武藝を流るる子流る  
天理小者る事あり真利成かるといふ

其他人を以て我れを多しとわらざる  
はあり又或旧記を以て大言後継久しく  
る、農工高賈を以てこころよく其業を  
勤む、武士は馬に力有り、其業を以て  
と年、学問といふ事も其業にあらざる  
せん、其業を以て今も馬に力有り、其業  
と者も或は一概に其業にあらざる、其業  
人の心を以て其業にあらざる、其業  
武意に全く其業にあらざる、其業

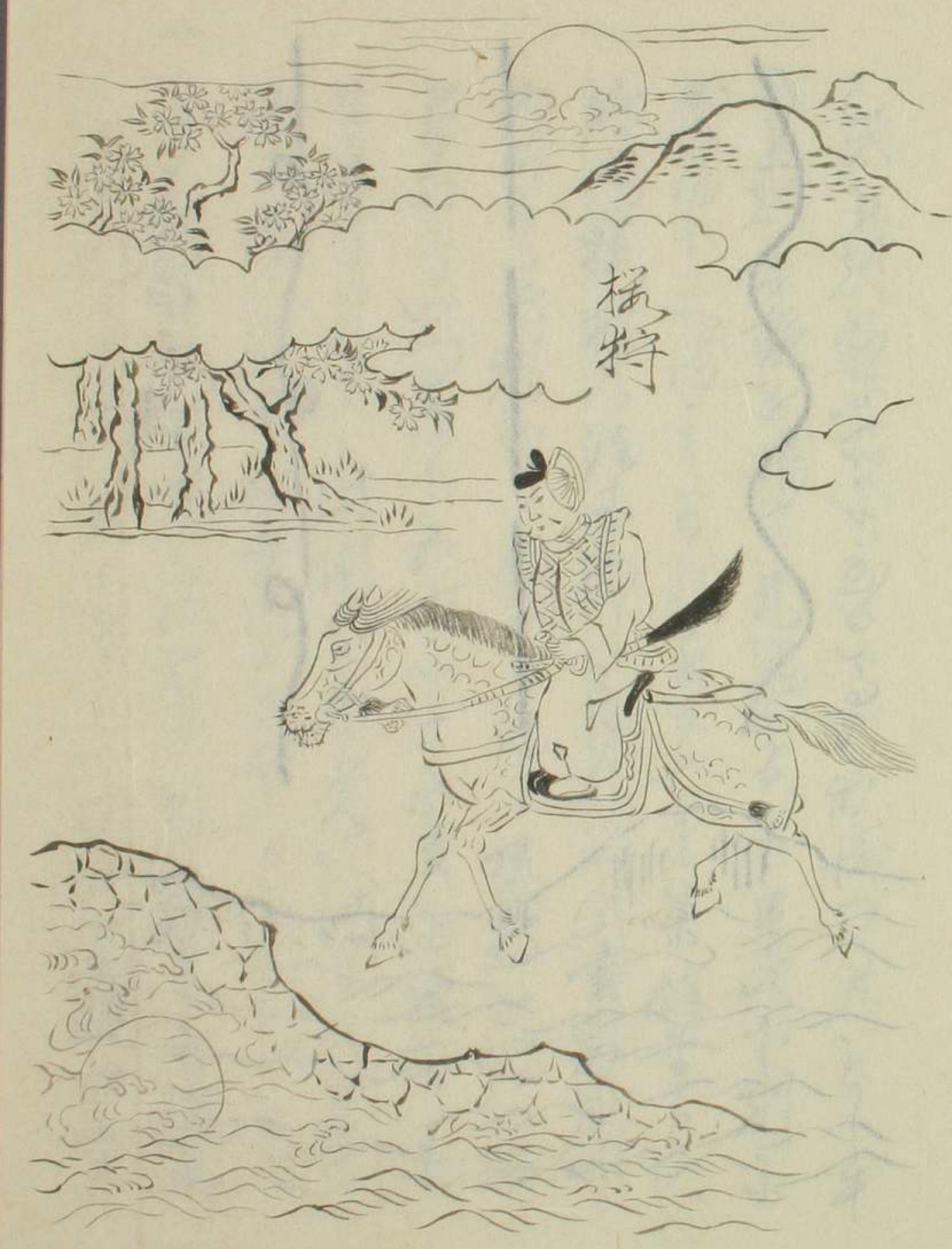
一 胡志ある者、其業にあらざる、其業  
一 軍の、胡志ある者、其業にあらざる、其業  
入、一 教、其業にあらざる、其業  
ひて天地、其業にあらざる、其業  
感、其業にあらざる、其業  
可、其業にあらざる、其業  
与、其業にあらざる、其業  
也、其業にあらざる、其業  
事、其業にあらざる、其業  
俄、其業にあらざる、其業

臣等の先親を以て河内やと流傳はて我軍破  
也今も教札一に既し必死す之に河内記述とす  
危るま致かりて河内もあつて翔来りて先親の  
命を救ひししそ介自今もその勇特勝斗を以  
て神妙の如きに實れん致す之を益教とす  
といふものもあつたりんや

一 古より先代との和隆の記録をえ得るは我功を  
あしむる名をともいへども強もたしと悍もあつ  
是も不悍也我功をあしむるに例を求むれば然  
りともさし得る人強もたしとあつたりんや

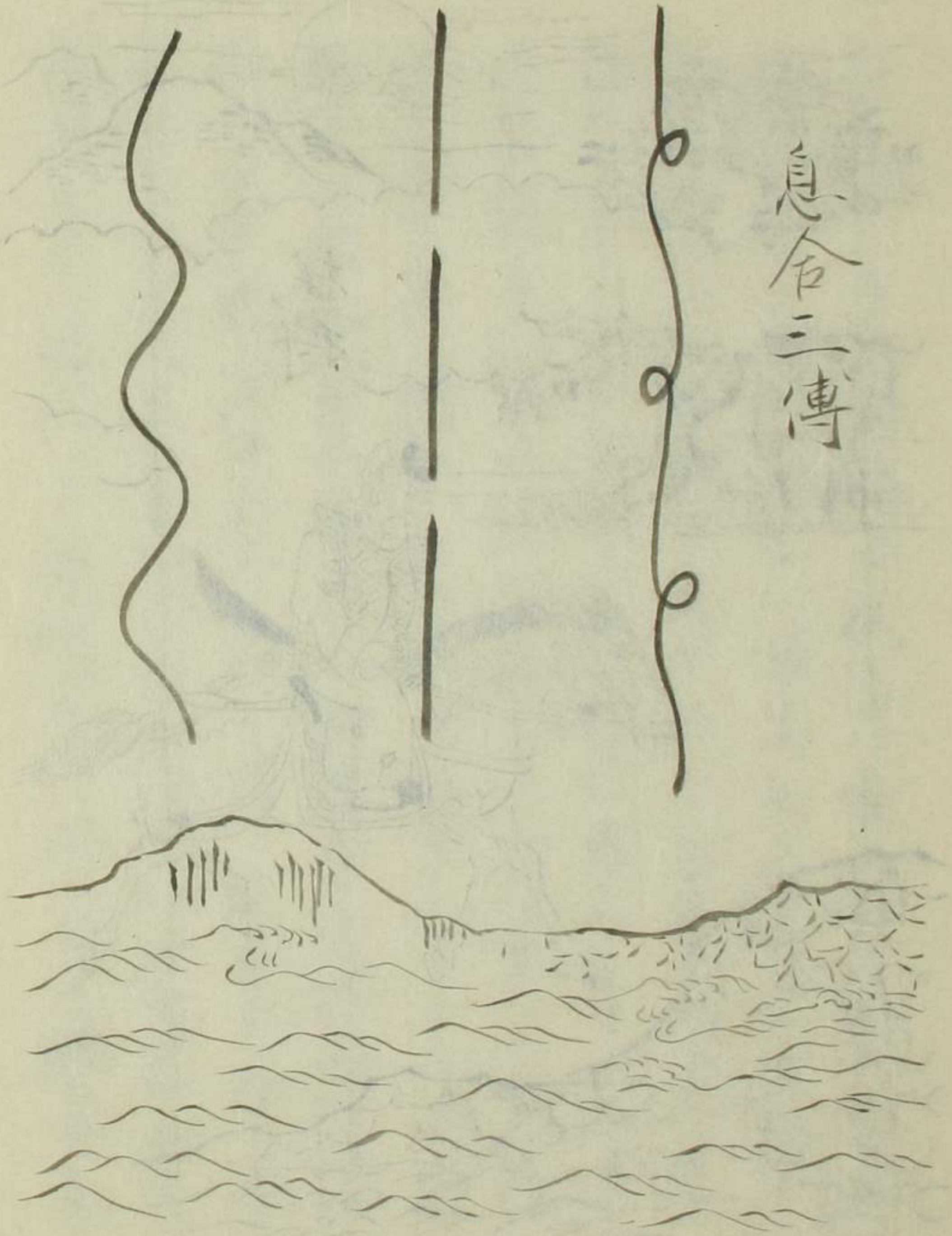
田与市に名を以てて候はと長尾中河内一也林  
之部も大乗色に事や水石合致し今致す子然  
こもまたけひするも致す事や桶正成も作  
勢のするあふせん本に寸斗力をもて是強  
して是の事も致す事と書も不事  
一 執下はまりするに達者なりて是は子方れを  
背の伸るも致す事とす  
一 軍のするに一年目とすは口以和し是致す  
教を流るる何人をお親ると云  
一 海陸を事しと書と解すに習ふ和中に是致す

一 在事と云事、倭子根持の事、静の在事、意  
 在事あり、静の在事、百里宗の事、王於  
 海濱子宗、以て、教を為せとも、方より、て、そ  
 功ありとも、意、静の在事、の習、子、ま、る、の、意  
 の在事、と、繁、の、城、中、城、り、り、の、事、を、な、法  
 津、東、に、十、里、を、限、を、ま、る、之、境、を、た、あ、り、ま、し、て、い、ま、功  
 成、り、一、宗、人、又、習、ふ、あ、ま、れ、津、邊、志、に、此、宗、の、傳  
 あり、是、れ、洞、子、也、習、あり、あ、り、ま、し、て、二、ヶ、夜、事、を、あ、り、予  
 天、和、元、年、三、月、十、日、出、世、高、士、同、を、い、り、し、こ、り、ま、り、て  
 武、陽、より、相、列、小、坪、村、と、い、ふ、こ、り、と、七、馳、り、り、小



根持

息令三傳



この中別ありあすの秋はついでとて年  
の上別分敬と揚て此編をる子申の下別子  
我陽より一志する計是也七里羊傳まるとん  
昨傳様抄の法子ありとんふけ奉あんや  
ありとて教あり又子ら流子様抄を流下  
奉ありとても五何子亦五里を池て馬  
半漢よりとては制を宗是く流るつとて  
流子傳ててて功孝とてすつとて  
一河を流るす奉流あり教あり一語後  
一とて流るす奉流あり教あり一語後



一 新摺墨子寄て 宇治の八川流るるて  
 世子養をゆせり 田原又ち市島山原日  
 重たしる 茂の法を以てしるて 其功  
 まし 世子のひらきし 漢小馳驅水曲と云  
 倭のこゝ 茂のひらきし あり 大河あり 小  
 河あり 海あり 浅き河あり 石目あり 砂  
 川あり 浪川あり 老子能訓して 人る 老  
 親し こそ こそ 切ある あり 知し  
 一 物見の古者 こそ びん こそ 月と 教へ 宗下  
 一 騎物見 維物見の こそ 宗下 あり 大物見

中物見とも 小又 こそ 大物見 こそ 小物見 あり こそ  
 こそ 通者 小あり こそ こそ 軍兵 びん こそ

- 一 馬六具とて こそ 禮の 名も あり 月と 小 こそ 場あり
- 一 入三長の 習ひ あり 誰か こそ あり 岩松 あり
- 一 宗印 宗印 の 侍有
- 一 こそ 致し こそ 鼻辨 こそ 越 こそ 歌 こそ 為 齋 墨子
- 一 離 こそ 歌 こそ 歌 こそ 付 こそ 地 こそ 侍 こそ 前 こそ 侍 こそ 高 こそ 里
- 一 房 こそ 小 連 こそ 横 こそ 付 こそ 手 こそ 小 あり こそ 別 こそ

子たる道一別子に離れて一事に成る事  
まうと此の道に好むけたうと云く有  
也一雷を石火の如く物も角僅十文字  
八花散り字彼甲羅板池毎一能り自在  
子と云ふこと一騎致一騎と云て万騎致  
ふと云秘術と云ふ事あり

一或再馬系と云ふ者の教一是は上上の秘是  
是の上の力か事と云て術と得れるあり大  
坂大礼慶七は方の流儀と云中々一軍取  
の事あんなや押てありといふ事ある皆此

意の如く其場以踏ふる者の其事にトトク  
いふ事神もなり一入呼流小笠原流内流流の  
外を馬の如く切りひひるも又道致と云ふ  
少あり大和流八條流高野流も右三家より  
出く唐流流の如くありても流方あり  
るの如くはせざる事あり

一秘術と云く權極と云く高きせざるやと云く  
了む教あり其事の如くあれも迷子下  
と云何のまじい教と世行いとせんありと云  
事も流ひと云人あると云くことと云流の





里ありて一あり少一人評小流と  
加々大坪廣秀の門人教子一人  
免許の流十四身あり 豊村上永幸の  
免許の流七人あり 斗屋五右衛門  
の流三人あり 斗屋好吉の門人教子  
一人免許の流十人あり 玉忠を教武傳  
襲の印の取理會して 遠小敷守三  
流と名附し 金教を治る制の長者と  
あると下より 以兼科屋の事小本依  
の二事あり 玉忠より 依く不義徳

得し 一の枝系の大坪流江初子のこ  
より 一人教子集と 之る書武流の  
安藤好吉より 細川康政及び荒木安  
志子傳し 枝系の大坪流武陽小ひら  
まねりて 康政の流子田上右京進秀  
流あり 上回を以て 重なり 牛角の  
宗人頼業の二坪流 常叔明哲の人あり  
荒木安志の息十左衛門 尉元満と 一  
者あり 常叔上手の流子 依りて 人あり  
これに 頼業の二坪流あり 右の明哲の

掌も皆玉大好去の取よりあるは  
あり以外不枝々系類葉の天坪流  
世々まゝい

於人遺物に於て其の最良者  
此れは其の最良者にして其の  
其の最良者にして其の最良者  
其の最良者にして其の最良者  
其の最良者にして其の最良者  
其の最良者にして其の最良者  
其の最良者にして其の最良者  
其の最良者にして其の最良者

